

常陸国麻生藩 新庄家墓所

総寧寺(寺倉)には、新庄駿河守正頼ならびに正陳など、新庄氏一族の墳墓があります。巨大な五輪塔がならび、総寧寺墓所の最上段に設けられています。新庄氏は、坂田郡新庄の国人で、京極氏の古くからの被官である今井氏から出た一族です。新庄氏歴代の居城は箕浦荘の新庄城ですが、浅井氏の命により、古代からの湖上交通の要港である朝妻湊に朝妻城を築き、その守護のために新庄直昌が入りました。その子直頼は浅井氏に属しましたが、後に織田信長に降り、豊臣秀吉の馬廻り(大将の警護役)となります。直頼は、関ヶ原の戦いで西軍に属して東軍の伊賀上野城を落とし、戦後領地を失いますが、慶長9年(1604)に常陸・下野両国内に三万三百石を与えられ、麻生(茨城県行方市麻生)に陣屋を構えました。麻生藩は、延宝4年(1676)に5代直矩に跡継ぎがなく断絶しますが、同年に一万石で復活し、以後、15代、267年間移封されることなく続きました。

坂田郡出身の武将で、江戸時代の大名家として存続したのは、京極氏を除くと新庄氏しかありません。まして、関ヶ原の戦いで、やむをえずとはいえ西軍石田方に属しながら、小禄ですが関ヶ原以前の石高(摂津国高槻城一万三千石)以上に復活したのは、新

庄家だけではないでしょうか。これは、直頼と徳川家康との深い親交によるものといわれています。

新庄正頼は直頼の子で、天正7年(1579)に生まれました。駿河守を称し、父に従って、秀吉に仕え、のちに徳川家康に従って相伴衆を勤めました(『改訂近江国坂田郡志』)。慶長17年(1612)に没し、「月海晟珊総寧寺殿」と号しました。直陳は、幕末の廢藩置県後、子爵となり大正2年(1913)に没し、総寧寺に葬されました。朝妻城跡に鎮座する中島神社の鳥居にかかる扁額は子爵新庄直陳の揮毫によるものです。また、姉川古戦場にある戦没者の碑は、直陳が建立したものです。(高橋順之)



▲新庄家墓所

情報 BOX

米原市「秋の埋蔵文化財関係イベント」
『春風亭昇太のおも城廻(おもしろばなし)』
◆日時／10月2日(日)午後2時～
◆会場／伊吹薬草の里文化センター
※のろし駅伝10周年記念サミットとして、師匠と城郭研究家中井均氏との爆笑トークが展開されます。

『近江の山寺のなかの松尾寺』(仮題)
◆日時／11月20日(日)午後1時30分～(予定)
◆場所／米原市民交流プラザ(ルッチプラザ)
◆講師／奈良大学教授 坂井 秀弥 氏
※午前中に、今年度森林整備事業をおこなった松尾寺跡の見学会を予定しています。

『近江中世山城跡琵琶湖一周のろし駅伝』
◆日時／11月23日(水・祝)午前10時～
◆場所／鎌城跡、長比城跡、弥高寺跡ほか
※戦国時代ののろしを再現!近江各地から山城跡を活かしたまちづくり団体による「のろし」があがります。

『上平寺 雪室プロジェクト』(仮題)
◆日時／11月27日(日)時間未定 ◆場所・米原市上平寺地先
※京極氏が館を構えていた上平寺にのこる雪室。京極氏も利用していたと伝えられる遺構を復活します。

△問合せ先：米原市教育委員会歴史・文化財保護室
Tel 0749-55-8020 Fax 0749-55-4556

◆◆編集後記◆◆

発掘調査を忘れたカナリアです。ここ2年間とともに手ガリを持ったことがありません■でも、こんなときこそ、今まで積み上げられてきた埋蔵文化財の調査成果をお知らせするチャンス!■米原市では、せっせとマップ・リーフレット・パンフレットを作り■埋蔵文化財を活用したイベントをおこなっています■学校や地域に出向いて出前講座もおこなっています■ご用命は下記まで(シャンギリッ子)

米原市文化財ニュース

佐 加 太 第34号

発行 平成23年10月1日
編集 米原市教育委員会
〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1
米原市教育委員会生涯学習課歴史・文化財保護室
TEL.0749(55)8020
印刷 はなまる商店



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

第34号

2011年10月1日

滋賀県米原市教育委員会

山岳寺院・松尾寺跡が県史跡に指定

米原市が誇る魅力の一つとして、山岳寺院が集中していることが挙げられます。奈良時代に仏教が一般に広まっていくにつれ、元々あった山岳信仰と結び付き、修行のため山に入る修験者が増えていました。市内では伊吹山において、その特徴が顕著にみられます。平安時代の仁寿年間(851～853)に三修が伊吹山へ入山し、修行を始めます。その後、伊吹山には観音寺・弥高寺・長尾寺・太平寺といった寺が次々と創建され、やがては伊吹山四ヶ寺と称されることになりました。

今年の3月24日に、県史跡に指定された松尾寺跡も山岳寺院の一つとして数えられています。松尾寺跡は、上丹生にある松尾山中腹に位置しています。室町時代の成立とされる『興福寺官務牒疏』という史料には、奈良時代、靈仙山には靈山寺という寺が存在し、その別院として7つの寺がありました。その一つに松尾寺の名前を読み取ることができます。一方、寺伝によれば、天武天皇9年(680)に松尾山で修行していた役行者が雲に乗って飛来した聖観音像と十一面觀音像を洞窟内に安置したことから始まるされます。のちに、元慶年間(877～885)に伊吹山寺で修行していた松尾童子が堂宇を建立し、寺院として成立させたといわれています。しかしながら、確実に寺院の存在が確認できるのは鎌倉時代となってからです。それは、本堂跡のそばに立っている国指定の九重石塔の基礎台座に、「願主法師知覚、文永七年(1270)庚午八月日」と記されていることからうかがえます。戦国時代には、湖北地域

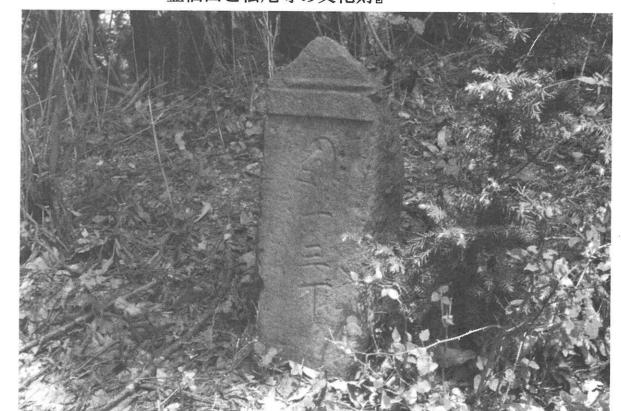


▲重要文化財 松尾寺九重塔

を支配した浅井氏や、石田三成の父・正継と書状を交わしています。このことから中世から近世にかけて、寺院としての勢力はかなりのものであり、盛時には50余りの坊院が存在していました。しかし、昭和56年の豪雪により本堂は倒壊してしまいます。その後も、倒木や土砂崩れによる遺跡の崩壊が著しく、このままでは地域の大切な史跡が消失する可能性も出てきました。そこで、旧米原町が平成3年度から遺跡の範囲確認と実態解明のための調査を開始しました。その結果、本堂の周辺からは平安時代前期から近代までの遺物が出土しました。特に、9世紀後半の灰釉陶器碗や綠釉陶器の香炉蓋など、松尾寺の創建時期を示す資料が出てきました。

建物はほとんど残っていませんが、西坂と下丹生からの参詣道の途中には本堂までの距離を示す丁石が点在し、坊院跡など往時の遺構も確認することができます。また、最近では松尾山の麓で本堂の再建が進められ、それに先んじて今年の5月には、松尾寺の資料を見ることができる松尾寺資料館が開館しています。これから往時の勢いを取り戻していただきたいですね。(梅本 匠)

参考文献：『伊吹山寺』伊吹町教育委員会
埋蔵文化財活用ブックレット2(近江の山寺2)
『靈仙山と松尾寺の文化財』



▲参詣道の丁石

調査報告①

庭園の池跡が出土 —能仁寺遺跡の調査②（清滝）—

本堂に付属する堂舎

前号で、京極氏第七代当主高詮の墓所があったと考えられる能仁寺遺跡から、本堂の基壇、山門跡、参道と石垣が見つかったことを報告しました。中世寺院の本堂基壇と付属施設がセットで見つかるという重要な成果でした。今年度、本堂基壇のさらに南側で調査が進められたところ、南方に隣接して石組み溝で区画された仏堂等の敷地二区画と、基壇南西部の下層から玉石を撒いた池跡が見つかりました。本堂基壇の南方で見つかった区画は、石組み溝で区切られ、二ヶ所の区画が東西に並んでいました。西方の区画（南西区画）は東西約5m、南北約11mで、南西区画の東溝を共有して南東区画が作られています。南東区画は東西10m以上、南北約8mです。この区画の内部には、礎石を安定させるための根石や小型の礎石があり、建物があったことがわかりました。一方、南西区画では建物の痕跡が認められず、区画の大きさからも建物の敷地にするにはふさわしくないようです。

本堂基壇が参道の正面にあって、本尊を安置する中心的な仏堂としてふさわしい位置を占めているのに対し、今回の区画はその脇にあって、付属的な位置を占めています。南東区画は、建物の規模・形状はわかりませんが、本堂に付属する堂舎だったと考えられます。奥行きが狭い南西区画は、資料や伝承から能仁寺に高詮の墓所が置かれていたとすると、この場所だと推定することができます。

本堂の下から庭園跡出土

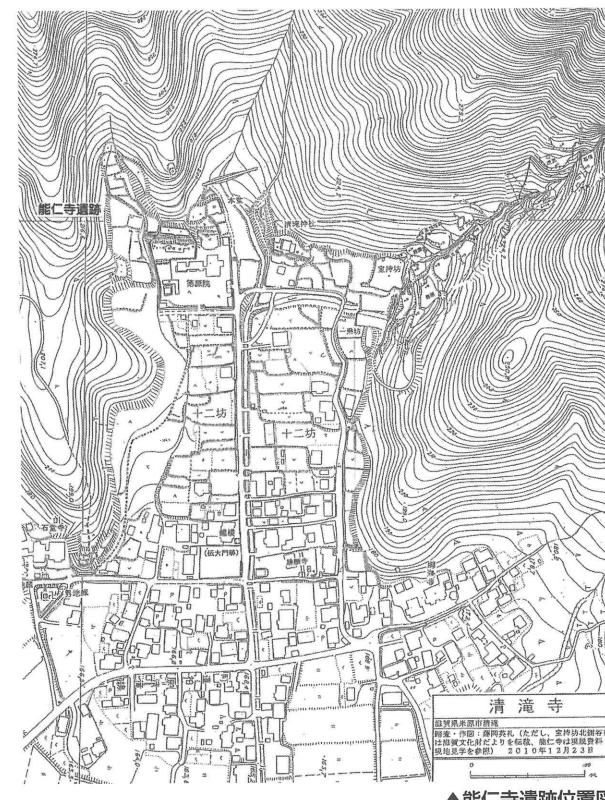
池跡は、底から汀（水際）まで、3～5cmほどの大きさの丸く扁平な川原石が、厚さ10cmほど積み敷かれ、池の見栄えを整えていたようです。撒き石の範囲は東西約3.7m、南北約2.5mで、中央部は汀よりも10cmほど窪んでいます。西端の汀には、撒き石に接して人頭大の石が残されており、本来は石列によって池の汀を護岸していたと推定されます。これらをあわせて、池の深さは20cm以下の浅いものだったようです。池への取水口や溝は壊されていましたが、排水口は東側に設けられています。自然石を埋めて排水口の両袖を作り、そこから本堂基壇の南辺に沿うように排水したようです。排水口付近の溝底には自然石で低い段差を三段つくり、水の流れに変化をもたせていたようです。庭園の景色を作りだす景石などは残っていませんでしたが、付近の上層遺構には大型の自然石が使用されており、景石を転用したものと推定されています。

庭園の一部とみられる池跡が、本堂基壇の下層から見つかったことから、能仁寺の築造に先行して、この地が切り開かれていたことがわかります。池跡の造り方（撒き石）は丁寧で、この庭園の施主は、高い身分の人だったことをうかがわせます。清滝寺徳源院に隣接する立地から、京極氏一族と考えられ、生前の京極高詮だったかもしれません。当時、京都に在住していた守護大名・京極氏の文化的志向の高さを伺うことができ、清滝の地が京極一族にとって重要な場所であったことがわかります。

（滋賀県教育委員会発掘調査現地説明会資料より）



▲本堂基壇南側の区画



▲能仁寺遺跡位置図

調査報告②

伊吹山麓「峠のシシ垣」の測量調査

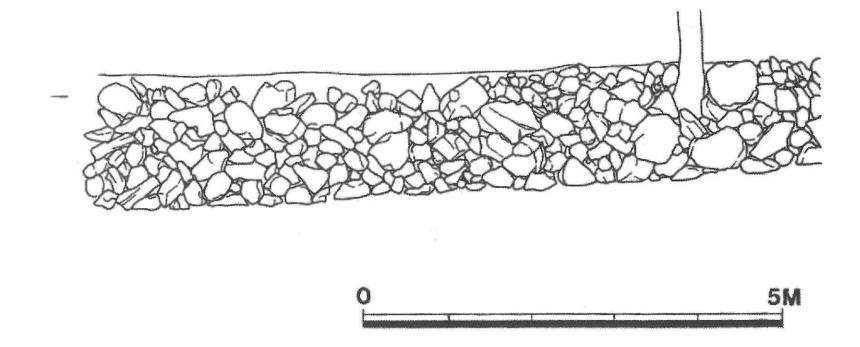
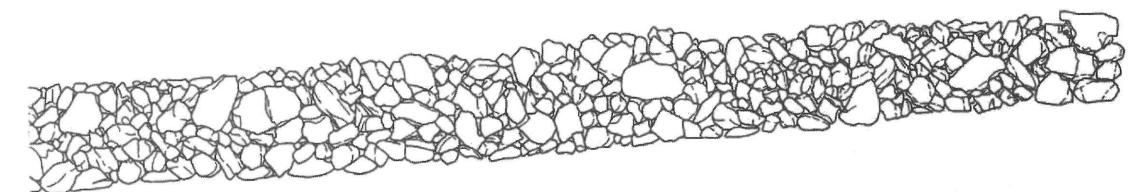
伊吹山麓「峠」地域のシシ垣は、滋賀県米原市大久保ならびに小泉にあります。現地は標高約300m前後の姉川に張り出した台地で、石灰石採石場の真下に展開するこの台地を通称「峠」とよび、肥えた土壤や寒暖の差、山から吹き降ろす風などの自然の恵みを受けて、古くから農耕地として利用されてきました。大久保や小泉周辺には耕地がなく、この台地は集落の生命線ともいえる土地でした。

シシ垣は、この台地全体を山から遮断するように構築されています。伊吹山に直結したこの地では、今日まで野生動物との戦いに、たいへんな苦労を強いられてきました。文政7年(1824)、浜松藩役所へシシ垣構築を願い出た文書や、天保5年(1834)に、領主浜松藩の普請にしていただくよう嘆願している文書がこされています(小泉藤田家文書)。文書からは、19世紀前半に全長約2,250mのシシ垣が完成していたことがわかります。現在確認されているシシ垣は1,000m弱で、台地縁辺部の北端から、東の山裾を林道に沿って続き、南端で斜面の落ち際を西に向かい、西側の姉川への急斜面手前の尾根でシシ垣は縦に落ちて、台地を完全に封鎖しているのを確認しています。

測量調査は、全長1,000mにおよぶシシ垣のうち、比較的良く残っている部分を対象にA区(延長21.5m／図)・B区(延長20m)に分けておこないました。シシ垣の野面積みを観察すると、道に面している側に面を整えているのがわかります。石と石の角を丁寧にあわせた作業がおこなわれており、裏込めの栗

石もしっかりと入っており、水はけを良くし、石垣の強度を高めています。B区の隅石は長辺と短辺の石を交互に組み合わせた算木積みとなってなめらかに立ち上がっており、他のコーナーや入口なども変化を持たせています。また、A区では1～2m間隔で直径70cm前後の大石を底部や中間に入れて安定させ、逆にB区では、巨岩の転石をそのまま用いたり、A区よりも比較的大きな石材を利用しており、積み方の違いが見られます。シシ垣は一部で雑木の根で崩落しているところや、ふくらみを持っている個所がありますが、おおむね良好に残っています。石材はすべて背後の崩落地で容易に採集できる石灰岩で、人ひとりでは抱えきれない大石を基底部や中央に置き、人頭大の石を野面積みに積み上げています。

以上のように、峠のシシ垣には随所に専門的な技術を観察することができます。シシ垣構築には専門の技術者の指導があったようです。その技術者とは誰か。台地を囲む伊吹・小泉・大久保の集落は、姉川の河岸段丘上にあり、いずれも高い石灰岩の石垣で集落が形成されています。また、巨大な石灰窯が随所に築造され、石材や石積みの扱いにたけた村人もいたようです。とくに伊吹地区には、近代に5軒の石垣積みと石材加工の家があり、これらの人びとの先祖が指導者の役割を果たしていたのではないでしょうか。シシ垣は村の歴史を語る貴重な遺構として、次世代に伝承していかなくてはならない文化財です。（高橋順之）



▲峠のシシ垣A区立面図